

科目名	日本文化論特講 I	担当者	オタギリ 小田切	フミヒロ 文洋	期間	通年	単位数	4
-----	-----------	-----	-------------	------------	----	----	-----	---

【科目概要】

目的	<p>日本の古典詩歌の本質を考えることは、日本文化の核心を考えることにもつながる。日本の古典詩歌の歴史には、時代ごとの特色があり、それぞれに豊かな成果がある。古典詩歌の多様性を体験する中から、個々の作品を貫く原理や詩歌史の連続性を考えることが目的となる。</p> <p>以上の目的を達成することにより、豊かな教養に基づく高い倫理観を涵養するとともに、論理的批判能力を育成し、問題発見とその解決能力、コミュニケーション能力、省察の能力が身に付けられることを目指す。</p>		
到達目標	<p>【一般目標 (GIO)】 古典の読解力を高めるとともに、日本文学研究、または比較文学研究に必要な専門性を修得することが目標となる。</p> <p>【行動目標 (SBOs)】 古典詩歌の解釈を踏まえて、日本の伝統詩形の本質を理解する。古典詩歌の解釈に必要な注釈書や辞書の活用の仕方、またデータベースの運用能力なども含める。</p> <p>【準備学修項目と準備学修時間】 文学研究一般に通じることだが、個々の研究テーマに即して基本となるテキストを熟読する。学修時間は、仕事の負担量との兼ね合いで決まるが、課題レポート1本につき最低45時間の学修時間が求められていることを念頭に置き、課題をまとめて下さい。</p>		
学修方略 (方法)	<p>【アクティブラーニングの有無・学修媒体等】 manaba folio を使った対話型の添削指導を丁寧に実施する。</p> <p>【学修方略 (LS)】 レポートと自習を中心とする。</p>		
スケジュール	<p>提出期日は、manaba-folio ならびに学事暦記載のとおりである。</p>		
成績評価	種別	割合	評価基準
	レポート	90%	レポートの内容(論文の構成力・引用文献の適切性・研究成果の有意義性)
	平常評価	10%	草稿から最終提出までの間の質疑応答
履修者への要望	<p>レポート課題は細かく設定していないので、受講する場合は一度ご連絡下さい。</p>		

【レポート課題】

基本教材 1	
教材の概要	著者名： 大岡信 教材名： 『うたげと孤心』岩波文庫，2017年 (ISBN978-4-00-312022-4)
	この著作で「うたげ」というのは、「笑いの共有。心の感合。二人以上の人々が団欒して生み出すもの」をいう。日本詩歌の創作の場にはたえずこの「うたげ」の原理が強く働いていた。同時にそれと相反する創作者の「孤心」が深められ、両者が緊張的に牽引しあうことで、古典詩歌の名作は生まれてきた。
参考図書	大岡信『日本の詩歌 その骨組みと素肌』岩波文庫，2017年 井上 宗雄・武川忠一編『新編和歌の解釈と鑑賞事典』笠間書院，1999年 尼ヶ崎彬『花鳥の使い 歌の道の詩学Ⅰ』勁草書房，1995年 川本皓嗣『日本詩歌の伝統—七五七の詩学—』岩波書店，1991年 藤井貞和編『折口信夫古典詩歌論』岩波文庫，2012年 風巻景次郎『中世の文学伝統』岩波文庫，1985年
履修上のポイント	日本の古典詩歌は、和歌(『古今和歌集』『新古今和歌集』『拾遺愚草』など)・連歌(『水無瀬三吟』『湯山三吟』など)・俳諧(『芭蕉七部集』『蕪村七部集』など)・歌謡(『梁塵秘抄』など)の各ジャンルで多くの名作がある。歴史と伝統を背景にした古典詩歌を論ずることは、日本文学の独自性を考えることであり、日本的美意識を明らかにすることにもなる(日本歌学を美学から分析した、大西克礼『幽玄とあはれ』岩波書店，1939年のような研究もある)。幸田露伴や現代詩人の安東次男が評釈している芭蕉連句は、心の通う者同士の座を背景に「孤心」を鋭く磨いて時代の頂点に立つ作品である(安東次男『芭蕉連句評釈 上・下』講談社学術文庫，1993・1994年)。
レポート課題 1	日本古典詩歌史上の名作(作品集，または詩人)を一つ選び、作品の分析を中心に大岡信の問題提起も踏まえてレポートをまとめる 留意点： テーマが決まったら、個別の参考図書を指示する。
レポート課題 2	レポート課題 1 と同じ。 留意点： 先行研究の調査には、CiNii(http://ci.nii.ac.jp/)や国文学論文目録データベース(http://base1.nijl.ac.jp/~rombun/)などのデータベースの活用が欠かせない。

基本教材 2	
教材の概要	著者名： 大岡信 教材名： 『詩人・菅原道真 うつしの美学』岩波現代文庫，2008年 (ISBN978-4-00-602136-8)
	大岡信はこの著作の中で、「写す・映す・移す」の意味を含む「うつし」の概念から日本文化の本質を考えている。中国の古典詩形を移入しながら、模倣から高次の創作へと深めていった道真の詩の世界が縦横に論じられている。「力強い構築性をもった叙事的精神」と「内面の抒情的な叫び」とが有機的な繋がりを持ちながら道真の内面において詩的一体性を形作っていると大岡は指摘している。
参考図書	菅野禮行・徳田武校注訳『日本漢詩集』(『新編日本古典文学全集 86』)小学館，2002年 富士川英郎『江戸後期の詩人たち』(東洋文庫 816)平凡社，2012年 富士川英郎『菅茶山と頼山陽』(東洋文庫 195)平凡社，1971年 中村真一郎『頼山陽とその時代 上・下』ちくま学芸文庫，2017年 『森鷗外全集 7・8 伊沢蘭軒 上・下』ちくま文庫，1996年 三好達治『諷詠十二月』講談社文芸文庫，2016年
履修上のポイント	日本漢詩の歴史は、菅原道真を最大の詩人とする王朝時代、夏目漱石が愛読した『蕉聖藁』の作者絶海中津ら禅者たちの活躍する五山時代を経て、儒学が普及し多くの詩人たちが輩出する江戸時代に大別することができる。江戸漢詩の魅力を発見したのはヨーロッパ文学者である。漢詩という詩形の面白さを鑑賞したい。漢詩は東アジアの各地域で作られたが、本場の中国で日本漢詩がどう評価されているか考えるのも一つの視点になる(李寅生著 宇野直人他監訳『漢詩名作集成 日本編』明德出版，2016年，中国では劉硯・馬沁選編『日本漢詩新編』安徽文芸出版社，1985年など，日本漢詩の詞華集が数種出ている)。
レポート課題 1	外国からの文化移入とそれを高次の概念に昇華していく文化的営為という、日本文化の本質的な問題を指摘した大岡の視点を踏まえながら、日本漢詩の三つの時代の中から一人の詩人を選び、その作品を鑑賞しなさい。 留意点： テーマが決まったら、個別の参考図書を指示する。
レポート課題 2	レポート課題 1 と同じ。